

太宰府の文化財

359

弥生時代研究の黎明と太宰府の遺跡

弥生時代は安定した農耕を中心とした社会構造が出来上がった時代とされ、稲作中心の日本社会の原点の時代とされています。弥生時代の研究は明治17（1884）年に現東京都文京区弥生町の貝塚で理学博士の坪井正五郎らにより、縄文土器とは異なる赤色の壺が発見されたことによつてはじまりました。その後、弥生土器は石器を使った「先史時代」のものとして、金属器を使用した「原史時代」の前の時代に位置付けられてきました。それに異論を唱える学者が現れます。東京帝国大学医

学部から明治39（1906）年に福岡医科大学（現在の九州大学医学部）に赴任した中山平次郎博士は、少年時代に読んだ弥生町の貝塚調査報告をきっかけに考古学に興味を持つたとされ、大正6（1917）年に『九州北部に於ける先史原史両時代中間期間の遺物に就て』という論文を発表しました。博士はこの福岡の地では弥生土器から青銅器が出土する事実を知り、先史と原史の間に石器と金属器が併用された「中間期間」が存在することを学会に提唱しました。これが現在使用されてい

る「弥生時代」となっています。中山博士は自説を補強するために精力的に福岡周辺で調査を進めます。そこで選ばれた場所の一つが太宰府の付近の高雄から二日市周辺にかけての丘陵地帯でした。その成果は『太宰府附近に於ける弥生式系統遺跡調査』として昭和5（1930）年に発表されます。博士はこの論文の冒頭で「銅銕銅剣が弥生式と時代的關係を有せる以上、弥生式系統遺跡の調査に際しては先づ以て調査区域内に於ける銅剣発掘例の有無を取調べ置く必要あり、太宰府附近出土のものは其の個数に於いても意外に多く、記録上からいふと此の地域が此種遺物の最も古き発見地を為して居る。」とし、「一日市峰畑遺跡の甕棺から出土した銅剣や高尾山周辺で

出土した銅戈（クリス形銅剣）の多量出土の事例などを検証し、報告しています。博士のこれら一連の研究が元となり、弥生時代が青銅器や一部に鉄器を用いた豊かな文化を形成し、邪馬台国をはじめとした東アジア世界に位置付けられる世界観や歴史観を形成することとなりました。

中山博士は先の論文を発表した昭和5（1930）年には九州考古学会を設立しており、九州考古学の父としてその功績は大きく、研究は弥生時代にとどまることなく大宰府出土の古瓦や古代外交施設であった鴻臚館跡、古代官道など現在の太宰府研究の基礎となる分野などにも及んでいます。

教科書に載る「弥生時代」の存在が証明される過程で、高雄地区を含む太宰府近郊の遺跡が研究の対象になっていたことは、案外知られていない事実です。

平成27年2月21日に九州国立博物館でおこなわれた第5回太宰府市景観・市民遺産会議において、高雄地区の皆さんを中心に結成された「高尾山の自然と歴史を語り継ごう会」によつて「高雄の自然と歴史」が市民遺産第11号に認定されました。この地域の遺跡研究が日本の歴史の1ページを構成していることも語り継がれることを願います。

文化財課 山村信榮



中山平次郎博士の肖像
(写真提供 福岡市博物館)



かつての高雄地区の遠景(平成元年)



高雄地区(吉ヶ浦遺跡)の弥生時代のカメ棺墓(昭和57年)